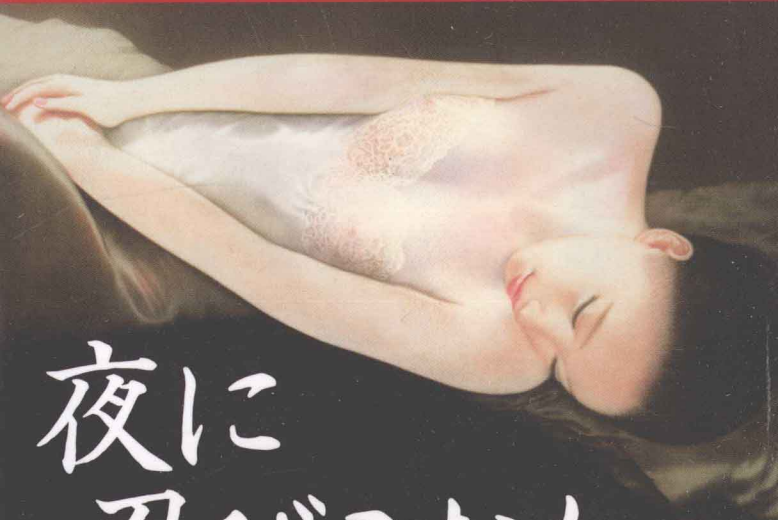


渡辺 淳一



夜に
忍びこむもの

文春文庫



文春文庫

よる　しの
夜に忍びこむもの

定価はカバーに
表示してあります

2009年12月10日　第1刷

著　者　わた　なべじゅんいち
渡辺　淳一

発行者　村上和宏

発行所　株式会社　文　藝　春　秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23　〒102-8008

T E L　03・3265・1211

文藝春秋ホームページ　<http://www.bunshun.co.jp>

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社製作部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷製本・凸版印刷

Printed in Japan

ISBN978-4-16-714527-9

文 春 文 庫

夜に忍びこむもの
渡辺 淳一



文 藝 春 秋

夜に忍びこむもの／目次

新	無	秋	宵	夜	稻
涼	月	冷	闇	寒	妻
7	25	45	65	93	111

解	東 ^こ	陽	狐	花	長	流
説	風 ^ち	炎	火	野	夜	星

川
西
政
明

298	263	237	223	203	171	143
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

夜に忍びこむもの

新

涼

銀座通りの賑わいを抜け、東へ昭和通りを一本越えると、急にネオンや人の数が減って、あたりは静まりかえる。

いわゆる東銀座の料亭街で、一方通行の小路には黒塗りのハイヤーが並び、そのあいだをときたま、お座敷へ向かう芸妓が小刻みな足どりで通り過ぎていく。バブルがはじけたとはいえ、この一帯にはなお夜の訪れとともに、好況時の名残りが潜んでいるようである。

その一軒、黒板塀の先の冠木門の前で滝沢秀樹が車から降りると、門のわきに立っていた案内の男が、「いらっしやいませ」と頭を下げて、奥へ告げる。

「ナショナルフーズの滝沢さま」

秀樹はこの「花村」を、仕事の関係者を接待するときなどにつかうので、すでに顔馴染みである。

入口に控えていた女性に案内されて二階へ上がり、廊下の左手の十畳ほどの部屋に入り、下座に坐ったところで、「立野というお客さんが見えたら、こちらへ案内して下さい」と、仲居に頼む。

そのまま運ばれてきた茶を飲み、煙草たばこを喫すっていると、「お客さまがお見えになりました」という声とともに、立野が現れる。

「少し、遅れたかな」

立野はあたりを見廻みまわしてから、秀樹にすすめられるままに吾亦紅われもこうと水引の花が交錯する床を背にした上座に坐る。

「今日は、二人だけなの？」

「いけませんか」

「いや、そんなことはないが……」

立野と秀樹は従兄弟いとこ同士だが、年齢は立野のほうが一廻ひとまわり上である。

三日前に電話をして今夜会う約束をしたとき、立野は、親戚しんせき同士でよく知っているのだから、そのあたりの鮎屋すしやかおでん屋でもいいといったが、秀樹はかまわず人目の少ない料亭を選んだ。

「個室で、男二人で密会か」

立野が冗談めかしているのに、秀樹は硬い表情を崩さず、

「今日はおრიいって、従兄にいさんに相談したいことがあるものですから……」

「俺おれに相談するようじゃ、ろくなことではないな」

仲居が、銀杏ぎんなんと湯がいた百合根ゆりねの突き出しを二人の前におき、ビールを注ついでくれる。すでに街は秋のたたずまいで、部屋のクーラーも弱くしているようだが、仕事のあと

なので一杯のビールはうまい。それを一気に飲み干したところで立野が軽く身をのりだす。

「それで、相談というのは、なにかね」

「それがあまり格好のいい話ではないのですが……」

「だから、俺に相談しようと思ったわけだろう」

この従兄いとこに気取っていても仕方がないと、秀樹は覚悟を決めて、

「お恥ずかしい話ですが、ちょっと際つき合っていた女性がいまして……」

立野はきいていないようにさらにビールを飲むが、それが彼一流の心づかいであることはわかる。

それでも秀樹は逡巡しゆんじゆんし、ひとつ息をついてから、思いきって試してみる。

「実は、その女性が妊娠してしまったのです」

そのまま顔を上げられず項垂うづだれていると、立野が低い声でつぶやく。

「なるほど……」

「まさかと思ったんですが」

「その女ひとは、いくつなの？」

「三十八です」

「君の三つ下か」

秀樹はこの夏で四十二歳になったばかりだから、正しくは四つ下である。

「古くからの、際き合い？」

「いや、まだ知り合って一年くらいですけど」

「それで？」

「その、子供のことですけど」

「もちろん、墮おちしてもらうのだろう」

「そのつもりだったのですが……」

「いやだ、というのか」

秀樹がうなずくと、立野は再びビールを飲み干して、

「それで困った、というわけだ」

「こんなこと、従兄にいさんにしか相談できないものですから」

「それはいいが、そのこと、美和子さんは知らないんだろう」

「誰だれにも、いつていません」

美和子は秀樹の妻で年齢は同じ四十二歳である。子供は中学生と小学生の二人の男の子がいるが、滝沢姓は妻の実家の姓である。美和子とは学生時代に知り合ったが、彼女の父が食品から洋酒まで幅広く輸入しているナショナルフーズのオーナーで、美和子は一人娘であったことから、請こわれて滝沢家の婿養子に入った。

そのときは「逆玉の輿こしだ」などといった冷やかされたが、立野だけは、そんなことは気にするな、といって賛成してくれた。

おかげで四十を少し越えた若さでナショナルフーズの営業担当常務に**抜擢**されたが、そのときも立野は、「俺はあくせく働いて、五十を越えてようやく広告代理店の役員なのに、お前はこれで将来の社長まで約束されたようなものだ」といって、祝福してくれた。

たしかに表面は異例の出世だが、養子だけに、社長である義父にはもとより、その娘である妻にもなにかと気をつかうことは多い。そのことを立野にいうと、「まあいいじゃないか、いずれすべてお前のものになるのだから」と、現実的なことをさりりという。秀樹は、立野のそうしたあけすけなところが好きで、今度のことも正直に告げる気になったのである。

「しかし、その女性は どうして産む気になったんだ」

その点は秀樹もわからなくて、困っていたところである。

「彼女は、君に奥さんと子供もいることも、知っているんだろう」

「もちろん、知っています」

「どこかに勤めているのか？」

「東西社で、『メトレス』という雑誌の編集をしています」

「メトレス」といえば、女性誌のなかでも二十代から三十代の女性を中心に、よく売れている雑誌だけに、立野も知っているようである。

「じゃあ、女性編集者か」

「その副編集長をしています」

「そういう女性がねえ」

立野がつぶやいたとき、再び襖ふすまが開いて仲居が吸いものの椀わんと刺身を盛った皿を持ってくる。二人は無言のままビールを注ぎ合い、仲居が去るのを待って立野がきく。

「ところで、その子は君の子であることに間違いはないんだね」

「ええ、まあ……」

「はつきりしないな、たしかなんだろう」

「そうだと思うんですが、向こうにはご主人がいるものですから……」

「じゃあ、彼女は結婚しているのか」

立野は呆あきれたように、秀樹を見て、

「それなら、彼の子かもしれないじゃないか」

「でも、彼女は家ではもうずっと、そういうことはしていないのです」

「しかし、そんなことはたしかめようがないだろう」

「そうなんです、同じ家においても部屋も別々のようで……」

「家庭内離婚、というやつか」

「それに、彼はしてもできない人らしくて……」

「どういふことだ？」

「もともと子供ができない人のようで、病院に行つて診みてもらったこともあるようで

す」

「だから、あなたの子供だというわけか」

秀樹が仕方なくうなずくと、立野は頸のあたりを指で撫ぜながら、

「旦那とはできないから、他の男とのあいだの子を産むというのも、ずいぶん無責任な話じゃないか。第一、そこまで旦那が許しているのか」

それは秀樹も気になっていたところである。

「そうでなければただではすまないぞ。それこそ旦那が怒って、大騒ぎに……」

立野はそこで急に声をひそめて、

「まさか、その女と一緒になろうというわけじゃないんだろうな」

「僕がですか？」

「結婚の約束でもして、彼女はそれを本気にして産もうと」

「いえ、そんなことはいいっていません」

彼女を好ましくは思っても、結婚まで考えたことはない。

「たしかに、君の立場でそんなことを考えるわけはない」

立野は自らにいいきかせるようにいつてから、

「もしかすると、その彼女は、君の地位に惚れているんじゃないのかね」

「僕の地位ですか？」

「なんといつても、君はナショナルフーズの次期社長だからな。この人の子供を産んで

おけば、それなりのことはしてもらえて損はないと」

「いえ、彼女はそういう人ではありません。産むといっても、別に援助はいらない、自分だけでやるから迷惑はかけない、といっていますから」

「しかし、そういうわけにはいかないだろう。本当に産むとなったら、ご主人と別れることになるかもしれないし、女手一つでは大変だ。君が勝手に産んだのだから俺は知らない、というわけにはいかないぞ」

立野は自分でビールを注ぎ足して、

「俺の知人で、外に子供ができて大問題になった男がいる。その彼女の場合も、初めはあなたに一切、迷惑はかけません。わたし一人の力で育てますといつて強引に産んだ。だが三年経ち五年経ち、一時病氣などして生活に困ってくると、やはり彼を頼ってきた。初めは少し子供の学資だけを援助して欲しいといつてきたが、彼も自分の子供だけに放っておけない。そのうち不憫になつて毎月きまつた額を送るようになり、そのまゝいまでも続いている。この場合、彼女に悪気がなかったことはたしかだが、結果として、全面的に彼に頼ることになつてしまった。むろん最後は奥さんにもわかり、それが原因でノイローゼになり、いまもときどき大喧嘩になるらしい」

立野の話は恐い。もしそれと同じようなことになったら、秀樹の場合は、養子という立場だけに一層弱い。とくに義父に知られて怒りに触れたら、家庭はもちろん、いまの会社の地位も危うくなる。